

# 舟渡おとしより相談センター

症 例 概 要 利用者 : 80代後半 介護保険申請中

病名: 認知症疑い

利用サービス: なし

経 過 : 自宅前にあるバス停留所ベンチにて日中から夜まで過ごされており、日々道行く方々の目に留まっていた女性。同居の長女がいるも干渉せず、不衛生な身なりなため入店を断る飲食店が増えてしまう。転倒し立ち上がれなことがあり通行人や店員が救急車を要請するも、ご本人が搬送を拒否し、包括へ連絡が入る頻度が増えていた。包括企画の「ケアポ畑 (仮)」をきっかけに、法人を超えた地域多職種連携にて、ケアポート板橋特養へ措置入所 (保護) する事に成功した事例。

## 内 容

H29年6月、同居の長女自身に子宮がんが見つかり、手術前の検査入院のため本氏の見守りをしてほしいと支援依頼が入る。その後、長女の抗がん剤治療は終わるも、見守りは継続していた。もの忘れや歩行機能の低下がみられ、季節に合わない服装でバス停付近を伝い歩きしている状況。長女が受診等を勧めるも本氏が拒み続ける為、介護保険申請等に繋げることができず、長女とメールにて経過確認及び相談対応を行っていた。

R2.10月頃、受診への協力をさせて頂きたい旨を伝えるも、長女から、「訪問はしてほしくない」「干渉してほしくない」「警察に保護されたり、怪我をしても自業自得。協力は不要。」とのメールがあり、その後一切返答が途絶えてしまう。

本氏は、日中、バス停付近にあるスーパー、牛丼屋、中華屋などに出入りする。注文せず、店内で長時間過ごしていたり、尿臭があることから牛丼屋が警察へ通報したり、包括へ直接連絡をしてくることが頻回になってきていた。飲食店が次々に入店拒否し、本氏が昼食をとることができる飲食店が減少してしまう。入店できる飲食店が減ったことから、普段とは反対側にある路地を歩くことが増えた。その際、飲食店でもある認知症カフェゆずり葉 (以下、ゆずり葉) のオーナーが本氏を誘い、カフェ内で食事を提供して下さるようになる。

令和3年7月からケアポート板橋で地域の方々に解放しようと畑スペース活用が始まる。そこへ農福連携に取り組みだしていた“ゆずり葉”のメンバーが雑草を抜きに10月から月1回程度来所していた。その一員として、本氏が来所に成功。訪問診療が人道的に認知症カフェで診察して下さることとなり、介護

保険の申請が可能となった。老人福祉法の「やむを得ない措置」による特養への保護を区とケアポート板橋に打診し、合意を得る。

#### 【措置入所までの過程】

- ・令和3.10月上旬…本氏がゆずり葉メンバー 10名と共にタクシーにてケアポートへ来所に成功
- ・3日後…特養「やむを得ない措置」にて入居受入れ検討
- ・10月下旬…本氏をバス停にてピックアップ成功するも、拒否強く訪問診療医に繋げず
- ・11月中旬…「ゆずり葉」より本氏来所の連絡 訪問診療医連携にて初診に成功
- ・翌日…意見書を基に介護保険新規申請手続き
- ・11月中旬…「ゆずり葉」にて介護保険認定調査 同日訪問診療2回目

※この間、進捗について長女宅ポストへ手紙を投函し続ける

同時に本氏の姉・姪に進捗報告を行う

- ・11月下旬…自宅玄関外にて長女との接見に成功。特養入所の手承を得る
- ・1週間後…本氏自宅前バス停にてピックアップに成功。PCR検査を施設車内で実施
- ・12月上旬…検査結果「陰性」を確認し、措置入所となる

本氏が入店を断られる飲食店が増えた時期に、コロナウィルス感染症による緊急事態宣言が開け、地域の集いの場”ゆずり葉”が再開したことが、施設入所へのきっかけとなった。”食”を通して”ゆずり葉”の暖かい人たちと関係が築かれ、本氏の人への警戒心が徐々に溶け、その人らしい生活が継続できる環境へと移行すると共に、12/9長女が来所され、「正月には、母の好きなお寿司を届けたい」とご家族の絆も取り戻すことができた事例。フォーマルやインフォーマル、医療・介護が地域連携し、ご本人の安心・安全に寄与したこの事例は、まさに地域包括ケアであると考え、キラキラ介護賞に推薦させていただきます。